

能力評価基準の妥当性 —国際バカロレアの事例から—

早稲田大学大学院教育学研究科
御手洗 明佳

問題意識と調査結果

- ・意欲や態度を含む能力(コンピテンシー)は各教科において評価できるものなのか？

調査結果

国際バカロレア「LanguageA1」において

→評価できる

コンピテンシー

- コンピテンシー
- →「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することができる力」（OECD: 2003）
- →従来の学力観との差異化

背景：政策としての広がり

1980年代以降、特に90年代に入ってから、多くの経済先進諸国で共通した教育目標が掲げられるようになった(松下:2010)

日本

生きる力:1996、文部科学省

グローバル型能力:2009、文部科学省、経済産業省

人間力:2003、内閣府

キー・コンピテンシー:2006,OECD-DeSeCo

グローバル型能力

- 英語力
 - 広い視野
 - 社交力
 - 順応力
 - 自己表現力
-
- 『越境する日本人家族と教育ーグローバル型能力』の育成の葛藤』
 - 額賀美沙子(2013:59)

コンピテンシー育成の背景

- ミッチェル(2003)
- これらの先進国では、グローバリゼーションや新自由主義の圧力によって、国際競争力やに関する高い認識や、目まぐるしく変わる個人や国の状況に戦略的に適応する必要性によって動機づけられた「戦略的コスモポリタン」の育成に力が注がれている。(Mitchell 2003:388)

問題点

教育現場の教員の声

- 子どもに実際にどのような能力が育まれているかは目に見えないため、特定の文脈で見られる子どもの姿(≡パフォーマンス)から推察することしかできない。推察である以上、見た者の解釈に頼らざるを得ない部分は大きい。
 - (遠藤 2010:199)

日本における議論

- 意欲や態度を含むコンピテンシーを測定することについて妥当性は？
- →「測定不可能性」(本田2005, 広田2011)

そもそもの疑問点

- コンピテンシーは各教科で教え、評価することができるのか。

発表の目的

- 本発表は、コンピテンシーをIBプログラム「LanguageA1」がどのように評価しているか明らかにすることを目的する。
- 意義：
- 世界基準を謳うIB教育プログラムが抽象的な能力を含むコンピテンシーをどのように評価しているか明らかにすることで、日本の教育現場の実態と比較するための一つの実践例を提示できる。

調査方法

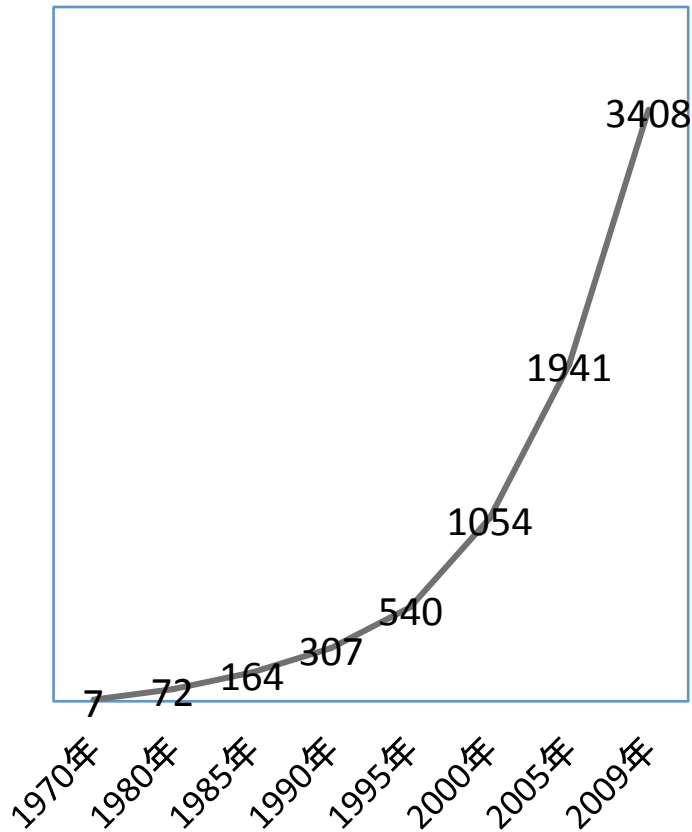
- IBプログラム「LanguageA1」の分析
- ①授業をおこなう教員及び生徒（授業実践を参与観察中におこなわれた会話をメモ、またその様子をICレコーダーで記録した音声を含む）
- ②授業で使用された教材（テスト問題、授業プリント）
- ③IBディプロマ・プログラムのガイドブック及び評価基準

調査対象の概要：国際バカロレアとは

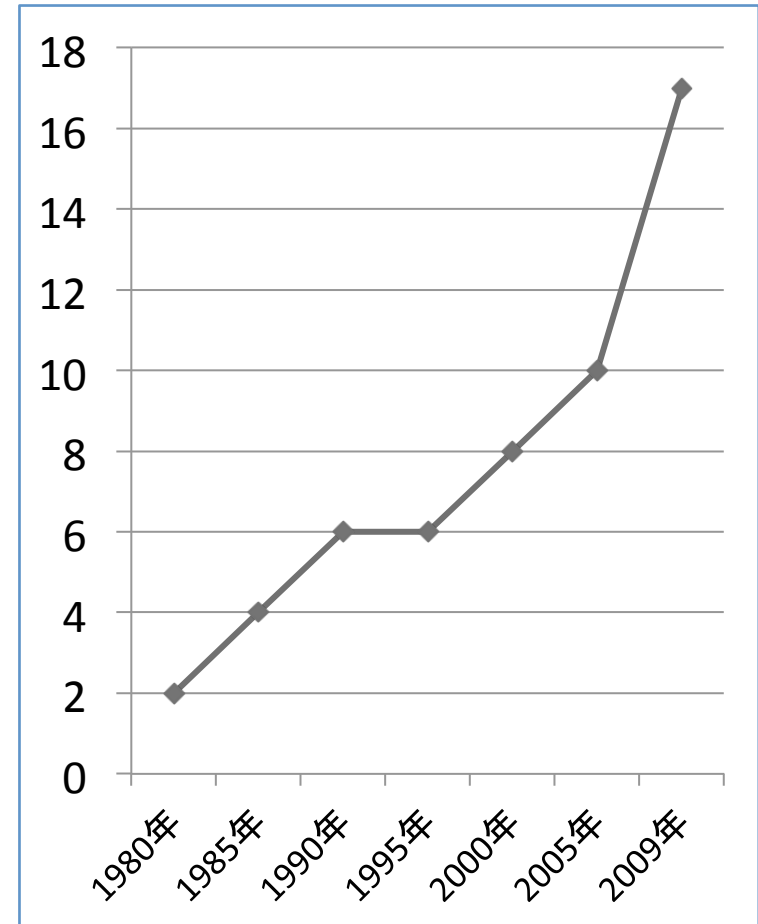
- 国際バカロレア機構(International Baccalaureate Organization: IBO)が定める教育プログラム・資格の総称。
- 主として国際学校のために作られたプログラムである。
- <歴史>
 - 1965年 国際バカロレア機構設立
 - 1966年 英国オックスフォード大学に研究・開発を委託
 - 1970年から実施(18校)

背景 (IB認定校の推移)

IB認定校(校)



IBスクール数の推移



日本のIBスクール推移

先行研究からみるIBの特徴

3つの側面

- 「国際理解教育」(吉田孝2007:21)
- 「西欧型エリート養成プログラム」(西村他1998)
- 「創造性・独創性を育む教育プログラム」(岩崎2007:9)

ピーターソン(初代IB事務総長)の意向

「単に知識を記憶するだけではなく**批判的分析**や**批判的学習**を中心としたカリキュラム開発を志向した」(岩崎2007:58)

⇒ 実際、どのように能力を涵養し、評価しているのか不明。

フィールドワークからみるIBの特徴

- 学校への評価
- 生徒への評価
- 教員への評価 [モデレーション(適正管理)]

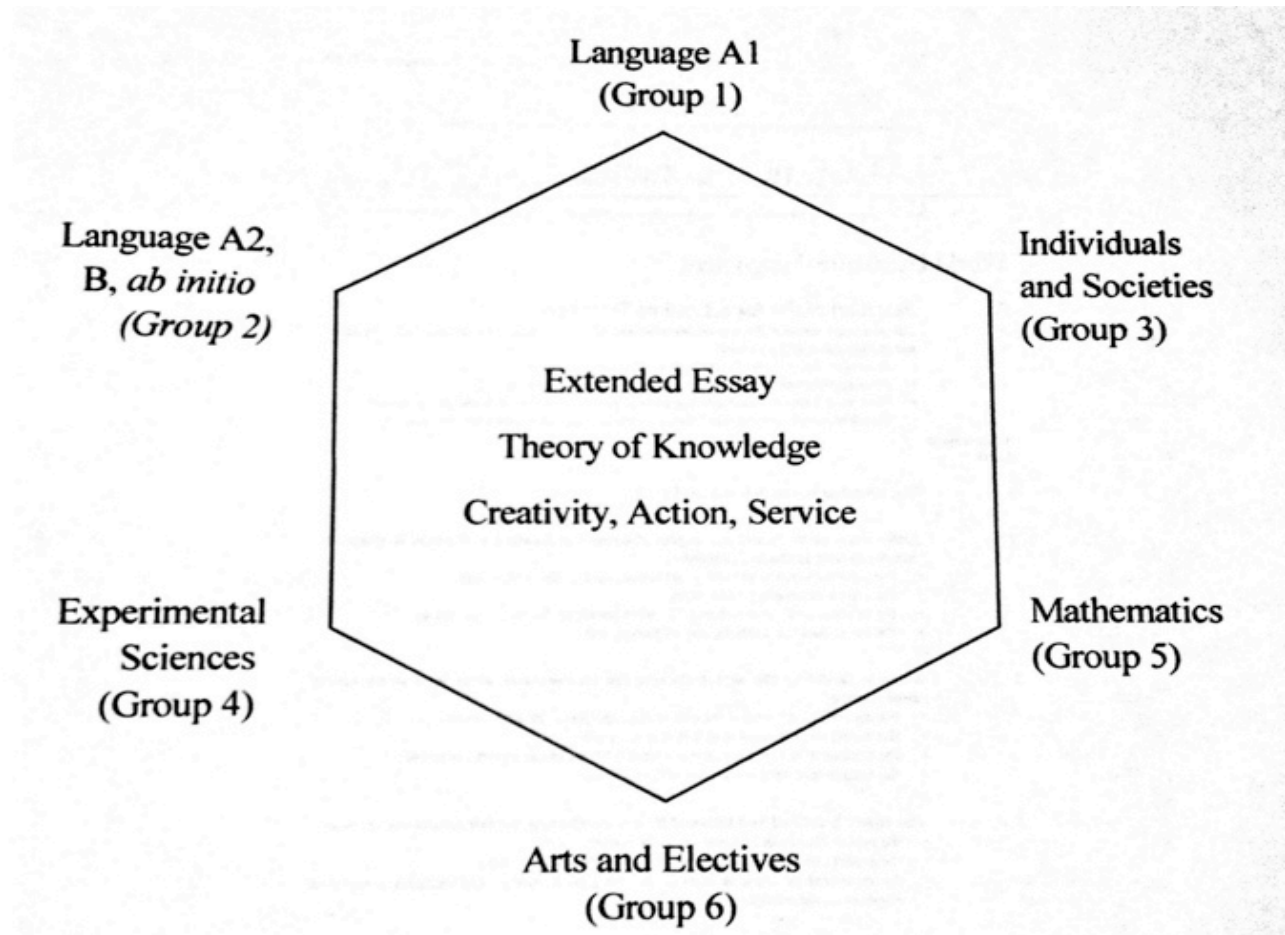
→**評価中心のシステム**

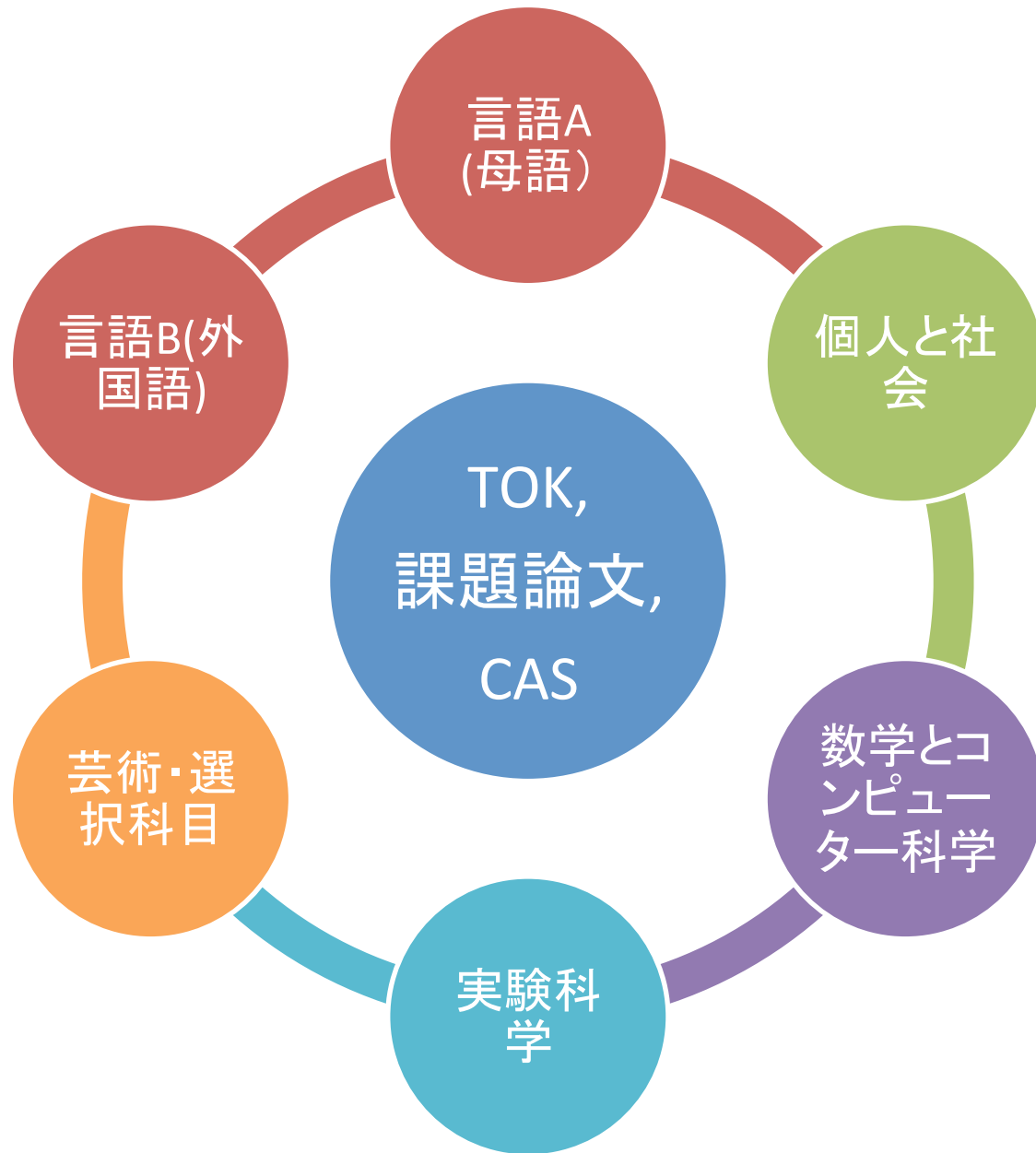
→IBガイドブックに記載された**評価基準表**を基に行われている。

課題の設定

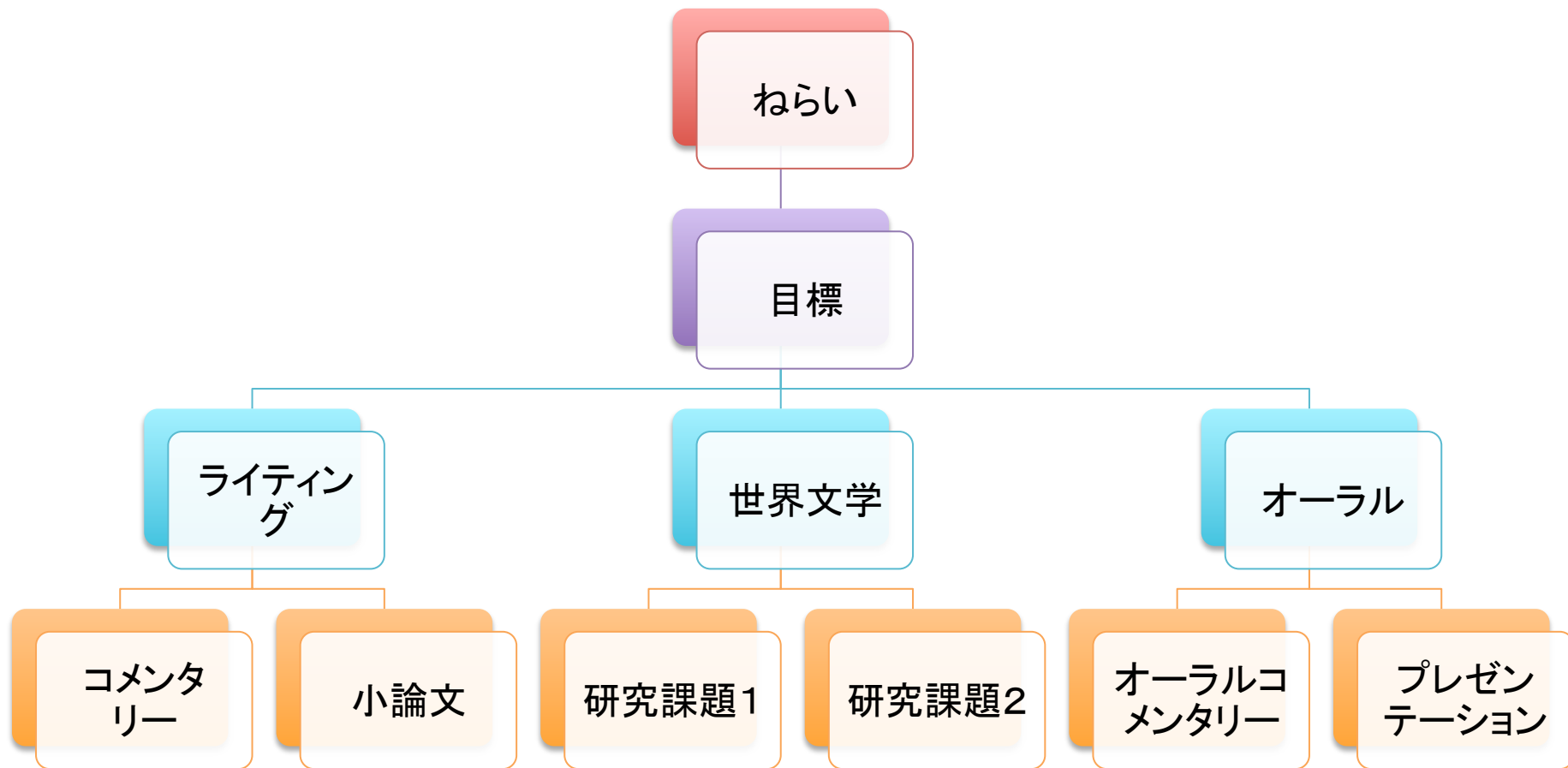
- IBの評価方法の構造を明らかにする。
- コンピテンシーはどのように評価に組み込まれ、評価されているのか明らかにする。

IBDPの構造





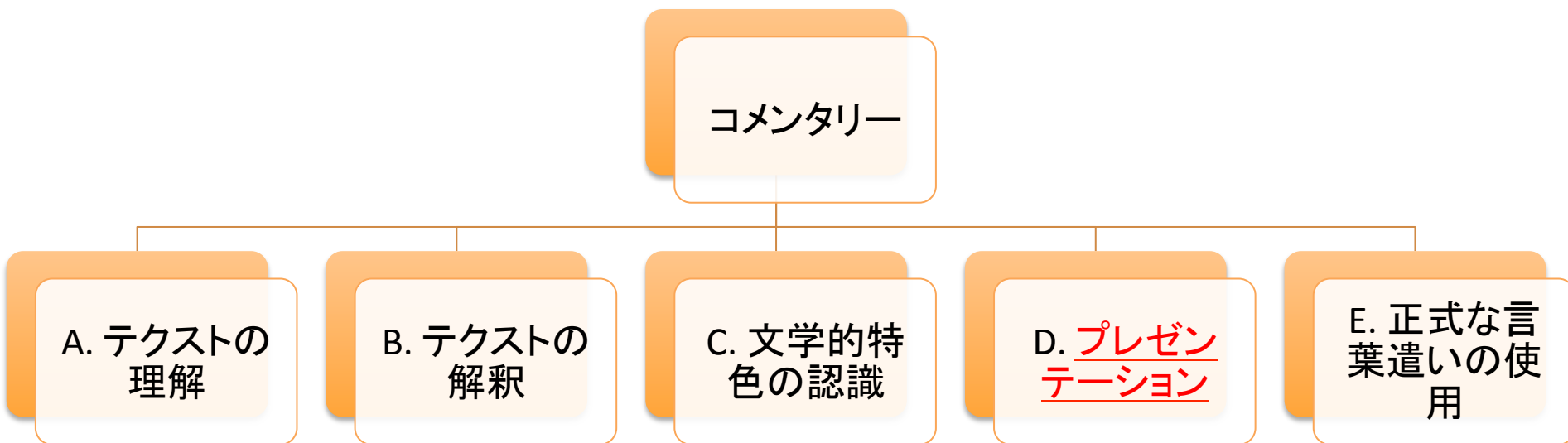
LanguageAの構成



評価基準A-D

- A:テキストの解釈と個人の反応（最高5点）
- B:テキストへの正しい評価、知識、インタラクション（最高5点）
- C:言語の使用（最高5点）
- D:コミュニケーションスキル（最高10点）

コメンタリー評価基準



特色

- ねらい／目標からのブレークダウン式の評価方法の構造
- =ルーブリック評価
- →「ねらい／目標」の重要性

評価配分

言語 A1 上級レベル 評価

外部評価		70%
1. ライティング		50%
解説文		25%
小論文		25%
2. 世界文学研究課題		20%
研究課題①		10%
研究課題②		10%
内部評価		30%
オーラル		
オーラルコメンタリー		15%
プレゼンテーション		15%

(IBO 1999 より筆者作成)

「LanguageA1」のねらい

- ① 文芸批評に関する技術の理解
- ② 表現力の強化
- ③ 多様な文学作品へ触れる
- (異なる時代、ジャンル、スタイル等)
- ④ 多様なアプローチ、形式、コンテクストへ触れる

ねらい:Aims

- ⑤「ものの見方」を広げる
 - ⑥文学を勉強する方法への理解
 - ⑦テキストの詳細な分析に従事する能力
 - ⑧生涯にわたる楽しみの獲得
-
- =文学の授業として設定されている。
 - =文芸批評に重点をおいている。

Language A1 Objectives

【Higher Level】

At the end of the course higher level Language A1 students are expected to demonstrate

(1) an ability to engage in independent literary criticism in a manner which reveals a personal response to literature.

(2) an ability to express ideas with clarity, coherence, conciseness, precision and fluency in both written and oral communication.

(3) a command of the language appropriate for the study of literature and a discriminating appreciation of the need for an effective choice of register and style in both written and oral communication

(4) a sound approach to literature through consideration of the works studied a thorough knowledge both of the individual work studied and the relationships between groups of works studied.

(5) an appreciation of the similarities and differences between literary works from different ages and/or culture.

(6) an ability to engage in independent textual commentary on both familiar and unfamiliar pieces of writing.

(7) a wide-ranging appreciation of structure, technique and style as employed by authors, and of their effects on the reader.

(8) an ability to structure ideas and arguments, both orally and in writing, in a logical, sustained and persuasive way, and to support them with precise and relevant examples.

出典 : Tamagawa Academy ib programs course syllabi 2011/2012 ((1) – (8) の番号

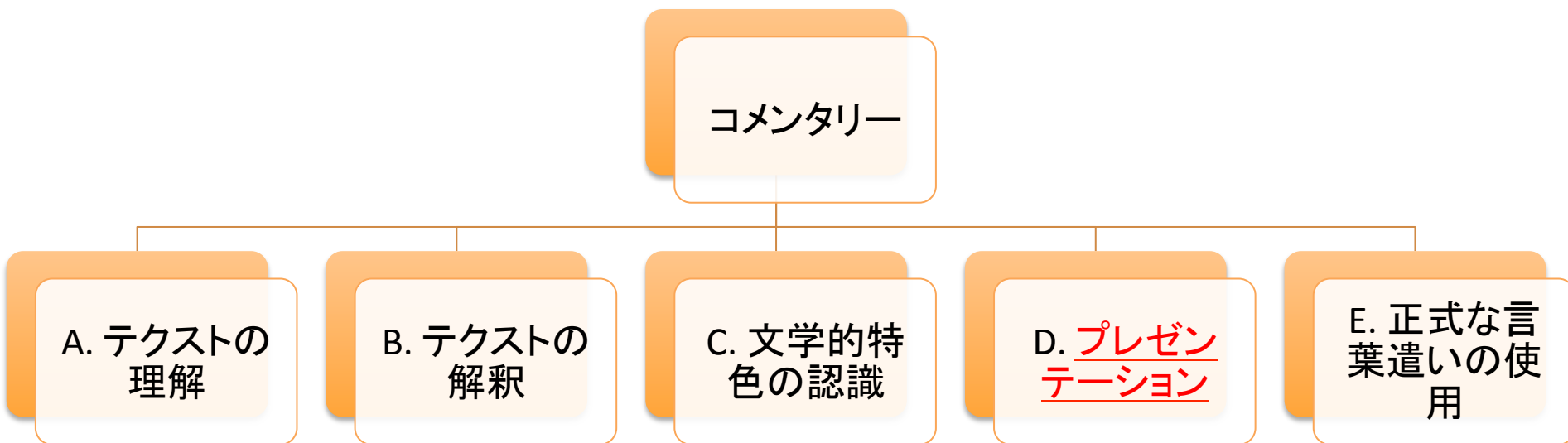
目標: Objectives

- 自立的に文芸批評に従事する能力
- 自らの考えを表現する能力
- 適切な言動を操る能力
- 適切な方法で文学へアプローチする能力
- 世代間、文化間の認識の類似点と相違点の理解
- 親しみやすいものから馴染みが薄いものまで、両方のテキスト解釈に従事する能力

ねらい、目標

- 「自己を表現する」能力が目標に設定されている。
- では、表現する能力はどのように評価されるのか。

コメンタリー評価基準



Paper1(コメンタリー)評価規準

- A:テキストの理解
- B:テキストの解釈
- C:文学的特色の認識
- D:プレゼンテーション
- E:正式な言葉遣いの使用

D : Presentation

- *How well has the candidate organized the commentary?*
- 候補者はどれくらい上手にコメントリーを計画できたか。
- *How effectively have the candidate's ideas been presented?*
- 候補者はどれくらい効果的に考えを示せたか。
- *To what extent are supporting examples integrated into the body of the commentary?*
- どれくらいの分量が文中の根拠によって補完されたか。

評価基準：D レベル0-3

- Level0
- The candidate has not reached level 1.

- Level1
- Little sense of a focused and developed argument.
- ▫ little evidence of a structure to the commentary.
- ▫ little attempt to present ideas in an ordered or logical sequence.

- Level2
- Some sense of a focused and developed argument.
- ▫ Some evidence of a structure to the commentary.
- ▫ Some attempt to present ideas in an ordered or logical sequence.

- Level3
- A generally focused and developed argument.
- ▫ adequate structure to the commentary.
- ▫ ideas are generally presented in an ordered or logical sequence.
- ▫ supporting example are sometimes appropriately integrated into the body of the commentary.

評価基準：D レベル4-5

- Level4
- A clearly focused and well-developed argument.
- ▪ clear and logical structure to the commentary.
- ▪ supporting examples are appropriately integrated into the body of the commentary.
- Level5
- A clearly focused, well-developed and persuasive argument.
- ▪ purposeful and effective structure to the commentary.
- ▪ supporting examples are well integrated into the body of the commentary.
- （IBO 1999より筆者作成）

最高点の条件

- レベル5
- (1)テーマに応じて発展的な議論に発達していること
- (2)明確な根拠が示されていること
- (3)考えが論理的な順序で示されていること
- (4)文中に示される根拠が適切な分量にまとめられていること

評価基準の形式

- ルーブリック評価
＝目標からのブレイクダウン形式

まとめ

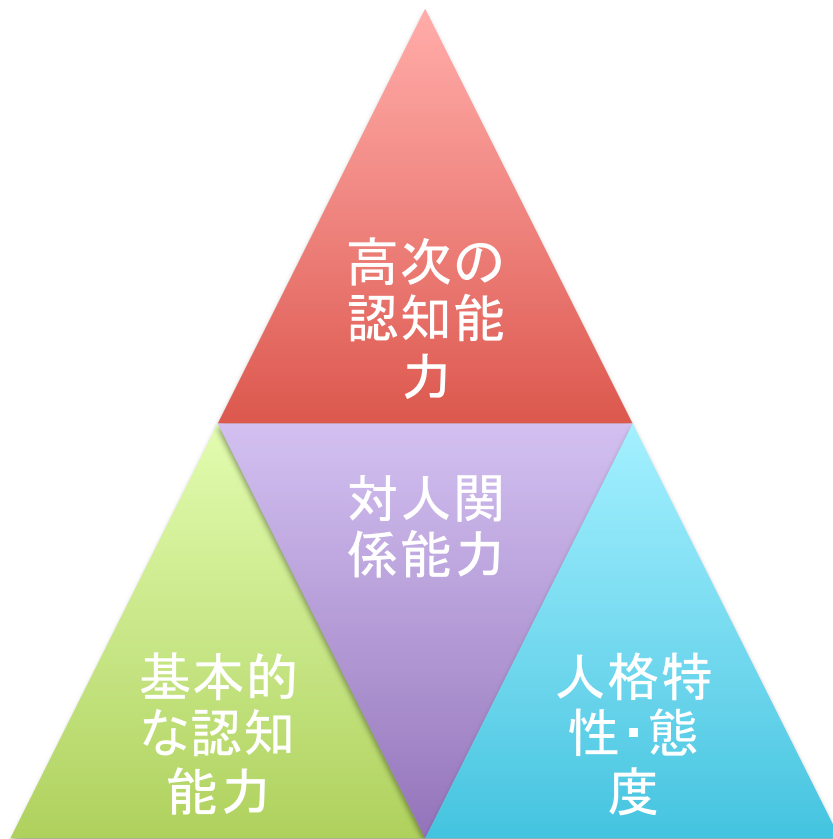
- IBでは意欲や態度を含むコンピテンシーを評価基準に組み込み評価している。
- その評価方法は、ルーブリック評価方式を採用して行われていた。
- しかし、その妥当性に関しては議論の余地が考えられる。

今後の課題

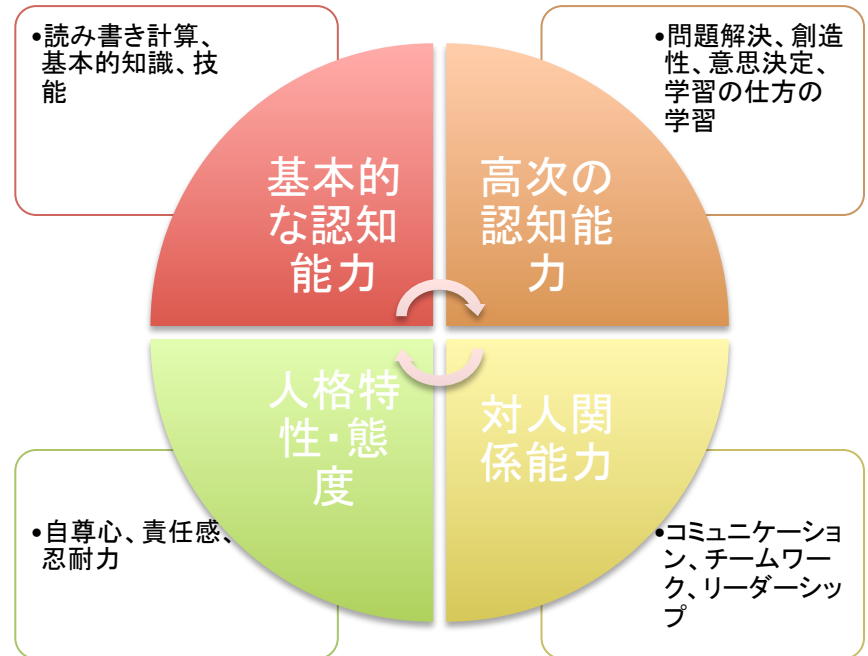
今回の調査からコンピテンシーの評価について、日本とIBでは能力の評価について違う認識を持っていることが明らかになった。なぜこのような違いがあるのか、今後の課題としたい。

(仮説)能力に関する認識のズレ

日本:積み上げ型



IB:スキル中心型



参考文献

- 浅沼茂,1998,「国際バカロレアにおけるカリキュラムの普遍性—国境を越える子どもたち」高野文彦・浅沼茂編, 1998,『国際バカロレアの研究』研究プロジェクト報告書, 東京学芸大海外子女教育センター, pp.1-8.
- Bernstein, B. (1974), *Class, codes and control* Vol. 1: Theoretical Studies towards a Sociology of Language 2nd edition, Routledge & Kegan Paul.(=1981,萩原元昭編訳『言語社会化論』 明治図書)
- Coleman, J, S. et al. (1966), *Equality of Educational Opportunity*, U.S. Government Printing Office.
- G. Rees, R. Fevre, J. Furlong, & S. Gorard, History,2006,“Biography and Place in the Learning Society: Toward a Sociology of Life-Long Learning”
- (=児美川孝一郎訳,2012,「学習社会における歴史・経歴・場所—生涯学習の社会学に向けて」H. ローダー 編, Ph. ブラウン 編, J-A. ディラボー 編, A. H. ハルゼー 編, 広田 照幸 編訳, 吉田 文 編訳, 本田 由紀 編訳『グローバル化・社会変動と教育1 市場と労働の教育社会学』) OECD教育研究革新センター編著, 2008,『学習の社会的成果—健康、市民・社会的関与と社会関係資本』明石書店.
- 原田信之編著,2007,『確かな学力と豊かな学力-各国教育改革 の実態と学力モデル-』ミネルヴァ書房.
- 久田敏彦,2007,「ドイツにおける学力問題と教育改革」大桃敏行・井ノ口淳三・植田健男・上杉孝實編『教育改革の国際比較』ミネルヴァ書房, pp36-37.
- 本田由紀,2005,『多元化する「能力」と日本社会—ハイパーメリトクラシー化のなかで』NTT出版会.
- 広田照幸,2011,「能力にもとづく選抜のあいまいさと恣意性—メリトクラシーは到来していない」宮寺晃夫編,『再検討 教育機会の平等』岩波書店.
- 広田照幸,2009,『格差・秩序不安と教育』世織書房.
- International Baccalaureate Organization, 2001, Diploma Programme Language A1 For first examinations in 2001.

参考文献

- Klitgaard, R. and Hall, G. (1974), Are there unusually effective schools?, *Journal of Human Resources*.
- 末藤美津子,1998,「言語」高野文彦・浅沼茂編,1998,『国際バカロレアの研究』研究プロジェクト報告書, 東京学芸大海外子女教育センター,pp.17-28.
- 宮腰英一・稲川英嗣・栗野正紀,1994,「国際的カリキュラムの開発と普及拡大ー国際バカロレア (IB) のジレンマー」『教育行政学会年報』第20巻, pp.245-257.
- 宮腰英一,1995,「教育の国際化」へ向けてー国際バカロレア (IB) の可能性ー」『創文』第366巻,pp.18-22.
- Mitchell, K. 2003. "Educating the Nation Citizen in Neoliberal Times: From the Multicultural Self to the Strategic Cosmopolitan." *Transactions of the Institute of British Geographers* 28:387-403.
- 額賀美沙子,2013『越境する日本人家族と教育「グローバル型能力」の育成と葛藤』勁草書房.
- 西村俊一,1998,「国際バカロレアのシムテムと内容」高野文彦・浅沼茂編,1998,『国際バカロレアの研究』研究プロジェクト報告書, 東京学芸大海外子女教育センター,pp.9-15.
- 相良憲昭・岩崎久美子,2007,『国際バカロレアー世界が認める卓越した教育プログラム』明石書店.
- Sammons, P. et al. (1996), Do Schools Perform Consistently across Outcomes and Areas?, Gray, J. et al. (eds.) *Merging Traditions*, Cassells.
- 志水宏吉編,2009,『「力のある学校」の探求』,大阪大学出版会.
- 高野文彦・浅沼茂編,1998,『国際バカロレアの研究』研究プロジェクト報告書, 東京学芸大海外子女教育センター.
- 東京大学学校教育高度化センター編,2009,『基礎学力を問う 21世紀日本の教育への展望』東京大学出版会.
- J. L. Austin, *How to Do Things with Words*, London, Oxford University Press, 1962.
- P. Grice, "Logic and conversation," in P. Cole & J. Morgan (Eds.): *Syntax and Semantics*, 3: Speech Acts, New York: Academic Press, 1975.
- 北弘志, "第5章3節 4技能の実際的指導法," 新英語科教育の研究(改訂版), 片山嘉雄・遠藤栄一・佐々木昭・松村幹男(編), pp. 216-226, 大修館書店, 1994.